

生涯学習社会の“まちづくり” 柏の葉キャンパスタウンの事例から

徳山郁夫¹⁾ 徳山美知代²⁾

¹⁾千葉大学環境健康フィールド科学センター ²⁾静岡福祉大学

Urban Development of Lifelong Learning Society: A Case Study of KASHIWANOHA Campus Town

TOKUYAMA Ikuo¹⁾ TOKUYAMA Michiyo²⁾

¹⁾Center for Environment, Health and Field Sciences, Chiba University

²⁾Shizuoka University of Welfare

これまで新たな“まちづくり”は、ハード・ウェアを作ることが優先され、人が生きるための基盤となる人間関係というソフト・ウェアについては着目されず、それは専ら住民に委ねられてきていたように見受けられる。新しい柏の葉キャンパスタウンの開発に際しては、公民学がやがてそこで暮らす住民の立場に成り代わり、住民のライフスタイルを想定するところから21世紀の“まちづくり”という新しい課題に取り組んできた。さらに、このなかで日本人のハビタス・メンタリスという見えない価値について学ぶ生涯学習と情熱を喚起する芸術の実現への動きが始動した。本論は、新しい“まちづくり”における生涯学習社会の実現というビジョンの必要性と柏の葉キャンパスタウンにおける具体的な取り組みの経緯を論じるものである。

キーワード：レジャー (leisure) ハビタス・メンタリス (mental habit) 芸術 (art)
コンパクト・シティ (compact city)

はじめに

2005年のつくばエクスプレス開業を見越し、2003年から産学官が結集し、産業づくりと“まちづくり”を推進する柏の葉キャンパス駅周辺の開発計画がスタートした。それは「環境・健康・創造・交流の街」を創る第一歩であった。本学はこの動きに呼応し2003年4月、柏の葉キャンパス(園芸学部農場)に「環境健康フィールド科学センター」¹⁾を設立し、環境、健康、共生、生きがい創出などのポジティブな実現、環境健康に関する総合科学、産業・行政のあり方の実践的研究への取り組み²⁾を始めた。

20世紀後半に人類は、地球規模の環境問題という新しい課題と向き合うことになった。環境問題は、大量生産・大量消費に依存する工業化した都市型のライフスタイルが大きな要因の一つになっていることを否めない。そして先進的産業社会の多くの過密都市は、環境問題を深刻化させながら同時に種々の心理的ストレスにも直面している。

ハード・ウェアの側面から生活基盤を整備し、便利で美しい景観の街づくりを推進してきた。しかし、その結果生み出された社会システムは、自然破壊、資源枯渇、廃棄物の増大による環境汚染などを引き起こすとともに、一方で生きがいの喪失、ふれあいの喪失、ひきこもり、ニート、うつ症状など、心の病ともいえるさまざまな心理ストレスも生じさせてきた。さらにこの社会システム

を運用する財政も逼迫し暗礁に乗り上げている。21世紀に始まった柏の葉キャンパスタウンの新しい“まちづくり”はこのような背景のもと、これらの課題解決に向けた取り組みでもある。

都市計画法が定められる以前のわが国の都市の発達、城下町の誕生、産業化に伴う近代都市の誕生、そして高度成長期に伴う都市の膨張という大きな波があった³⁾。特に高度成長期には、ニュータウンというベッドタウンの内部に文教地区、商業地区、外縁部にオフィス地区、工場地区、農業地区など、職業・産業ごとに活動区域を開発してきた。すなわち、工業都市(団地)、ベッドタウンなど、機能的に特化した街が作られてきた。このような開発は、一定エリア内で仕事と生活を完結できるというイギリスなどに見られる田園都市ニュータウン構想とは性格が異なるものになった。また、わが国の都市開発は、結果的に核家族を生み出すことになり、家族システムに深い影響を及ぼすとともに、開発された地域に同世代が大挙移住するという現象を誘発し、やがて地域ぐるみの高齢化を招来するケースを多く生み出すことにもなった。21世紀の“まちづくり”は、職業上の交流だけではなく、日常の暮らしのあり方や地域における人々の交流など職業以外のライフスタイルを豊かにするものでなければならない。日常の暮らしとは、職業的側面のみならず、子育てなどの家族の営み、友人との交流、地域の人々との関りなど、自由時間の過ごし方を包括した人間としての人生のあり方である。

元来、“まち”をめぐる人間関係は、そこに住む人々の相互補完的生活の中で自発的に紡ぎだされてきたもの

連絡先著者：徳山郁夫

に他ならない。しかし今日では、近所付き合いも極めて希薄になり、自発的な繋がりが生まれるどころか、従来から近隣に築かれてきた関係さえほころんできているのが実情である。“まち”の存立は、建物や道路などの物質的ハード・ウェア的側面だけで成り立つものではない。“まち”は、ハード・ウェアそのものを指すものではなく、そこで営まれる人々の生活であり、人々の間に築かれる絆というソフト・ウェア的側面を指すものであると考える。

21世紀の新たな“まちづくり”にはさまざまな社会的課題を克服することが期待される。ライフスタイルの変革、すなわち新たなライフスタイルのモデルづくりである。それは、仕事以外の自由な時間のライフスタイルを確立すること、すなわち自由時間を実りある生涯学習につなげるモデルづくりの必要性であり、新たな“まちづくり”のなかで考えなければならない重要な課題である。

個人の人格は独りで形成されるものではない。他者との交流を通して育まれるものであり、豊かな多様性に満ちた交流の必要性が求められる。仕事だけではなく、一人の人間として受け入れられる社会環境がなければ人間としての成長は望めない。このような観点から、“人間らしさの実現”という生涯学習の目的を理解し、大人になっても成長することを目指す社会的環境としての“まち”のあり方が、わが国の21世紀的課題になる。

以下、柏の葉キャンパスタウンの“まちづくり”の取り組みについて、生涯学習社会という側面に焦点を当てて振り返りを記録する。

“まちづくり”の始まり

ここでは、鉄道、道路、建造物など、ハード・ウェア以外の側面に焦点をあてた柏の葉キャンパスタウンの変遷を追いかける。

(1) 第一期；スタート

JR常磐線柏駅から離れたゴルフ場跡地につくばエクスプレスが通る。そのつくばエクスプレス開通を見越して、2003年から新たな住民のライフスタイルを想定し産学官が共同で準備を進めたことは、新しい“まちづくり”への画期的な取り組みである⁴⁾。そして、つくばエクスプレス開通後産学官の共同体はUDCK（アーバン・デザイン・センター・柏の葉）という新しい機構としてオープン⁵⁾し、新しい“まちづくり”に重要な機能を果たしてきた。

この時期に柏の葉キャンパスタウンに本学「環境健康フィールド科学センター」が設立された。

栗生⁶⁾は、「環境」と「健康」を最優先する当センターのキャンパスのマスタープランを柏の葉キャンパス駅周辺を含む広域的な視野で考え、アメリカの社会学者P.レイの造語「ローハス；LOHAS (Lifestyles of Health and Sustainability)」を柏の葉キャンパスタウンのコンセプトとした。P.レイは、15万人に及ぶ価値観調査の結果から、人々を「信心深い保守派」、「民主主義と科学技術を信奉する近代主義者」、「ローハスを実践する生活創造者」という三つのタイプに分けた。そして「生活創

造者」に1) 環境に配慮したライフスタイルを心掛けている、2) 健康に配慮した食事を心掛けている、3) 持続可能な経済の実現を願っている、4) 薬に頼らず、病氣予防を心がけている、5) 自己実現に力を入れているという5つの特徴をあげている。

新たに生まれる“まち”を産業構造的・経済的側面から特徴づけるのみではなく、そこに転居してくる住民のライフスタイルを掲げて“まちづくり”のプランを展開することは、極めて異例な試みである。そしてこのコンセプトは、その後の柏の葉キャンパスタウンの“まちづくり”の重要な方向づけを果たすことになった。

千葉県・柏市・東京大学・千葉大学は、柏の葉国際キャンパスタウン構想づくりに取りかかり、2008年2月7日に千葉県、柏市、流山市、そして東京大学、千葉大学が連携して、「つくばエクスプレス沿線地域（柏・流山地域）における国際学術研究都市づくりシンポジウム」を開催し、その構想宣言を行った。“まちづくり”に大学が深くかかわったことは特筆すべきことである。

2003年、センターへ異動後の著者の関心は、文化的・社会的環境にあった。つまり、環境問題を考える時、人間はその主体であり同時に他者の重要な環境になっている。早熟で生まれる人間は、何一つ自分の力では生きるための行動ができない。人間は、社会的・文化的環境を自らに摂り込むことで生きることを可能にしてきた。学習すべき内容は、社会と文化にあり、学習しなければ生きることができないのである。しかし、今日ではハード・ウェア面へ依存する度合いが高くなり、自らが他者との関わりから社会と文化について学ぶことが少なくなってきた。社会や文化が蔑ろにされ、社会や文化というソフト・ウェアとの関わりが薄れ、“こころの病”が重要な課題になりつつある。

客観性、すなわち主体と客体の分離・断絶を前提とする近代科学の思想のもとでは、環境問題への解決の糸口は見えてこない。主体と客体の相互作用という平衡のなかに“生命現象”は生じている。環境と隔離し相互交流が途絶えると生命体は危機に瀕する。

個体と社会的環境の相互関係がうまくなじめばよいが、どちらかに相互関係を拒むことが生じると、弱い個体の側に歪が生じてしまう。著者は、フルバリュー・コントラクト⁷⁾というコンセプトを基盤に、より肯定的なコミュニケーション⁸⁾の活性化を図るワークショップを行い、肯定的なコミュニケーションが成立する環境という意味で社会的環境に焦点を当て、プログラムづくりの推進と“他者の環境としてある自身”を学ぶ講座を重ねてきた⁹⁾。

[第一期；“まちづくり”のマスタープラン]

2004年2月8日 「柏の葉キャンパス駅周辺のまちづくり連絡議会」（千葉県主催）発足

2005年8月24日 つくばエクスプレス開通

2006年11月 ららぽーと柏の葉オープン

2006年11月 UDCKオープン

2007年 柏の葉国際キャンパスタウン構想（千葉県・柏市・東京大学・千葉大学）

（構想検討委員会：雨宮慶幸，北沢猛，天野洋，栗生

明, 千葉県企画調整課長, 県土整備部技監, 柏市企画部長, 都市計画部長)

2008年2月7日「つくばエクスプレス沿線地域(柏・流山地域)における国際学術研究都市づくりシンポジウム」(さわやかちば県民プラザ; 小宮山宏東京大学総長, 古在豊樹千葉大学学長, 堂本暁子千葉県知事, 本多晃柏市長, 井崎義治流山市長, 大西隆東京大学教授)

(2) 第二期; “芸術・学術都市”の提案

2007年, 柏の葉一番街のマンションが完成し, 新たな住民が入り, いよいよ“まち”が動き出した。このタイミングを旨し, UDCKが中心となって住民主体の“まちのクラブ活動”や“まちづくりスクール”など市民参加のプロジェクトなど新しい取り組みが進んでいた¹⁰⁾。

この地区にある千葉県生涯学習センター・文化芸術センター「さわやかちば県民プラザ」(以下「県民プラザ」と略す)は, 行政予算の縮小のなかで運営方針を再検討していた。著者は, 県民プラザ所長大島健一氏から生涯学習センターの運営と生涯学習講座のプロデュースについて相談を受けた。

「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」が制定されて以来, 生涯学習を展開する場所を用意され, 市民の自由に学ぶ機会は増えた。しかし, 生涯学習が目指す方向性が不明確であり, 生涯学習センターが成果を目に見える形にするには, 事業数を増やし参加者数を動員するしか考えられない状況にあった。これではハッチンスが唱えた「生涯学習社会; The Learning Society」, あるいは1971年にユネスコが設けた教育開発国際委員会による報告書(フォール・レポート)“Learning to Be”に込められた“全体としての完全な人間を目指す”¹¹⁾という生涯学習の本質に近づくことが難しいと考えた。質的变化を追求する生涯学習が, 量的な評価を受けることで本質的な目標を展開できず歪んだ運営を余儀なくされていたと考える。

そこで, 生涯学習社会の理解を深めるために, 余暇開発センター研究主幹の頃からレジャー論の第一人者である松田義幸氏¹²⁾に依頼し, 県民とともに改めて生涯学習と生涯学習が“まちづくり”に果たす役割を学ぶ機会を設けた¹³⁾。

2008年11月9日, 千葉県知事(当時)堂本暁子氏, および本学前学長古在豊樹氏を県民プラザに迎えパネルディスカッション「充実のライフスタイルを考える; レジャーとしての学び」が実現した。松田氏はその基調講演¹⁴⁾で, 語源や古典に遡りながら, 古くから人類が目指してきた“人間らしさ”とわが国の今日の余暇時間の過ごし方の変遷を対比し, レジャーの価値についてわかりやすい解説を展開した。基調講演に続くパネルディスカッションでは, 芸術に焦点が当てられた。県民の情熱とパワーによる県の発展, 自然と一体化するライフスタイルと話題は展開していったが, 生命力, 情熱を鼓舞し, 精神の自由をもたらすもの, それは言葉, 文学, 芸術である, というところにパネリストの意見は集約されていった。さらに“芸術”というキーワードに話題が集約していった。そして, この生命力を鼓舞する芸術と, 満

ち溢れた生命力を表現するテクノロジーが結びつくところこそが, 21世紀の新しいライフスタイルのモデルであるという結論に達し, 松田氏から「柏の葉国際学術都市構想」について「柏の葉国際芸術・学術都市構想」とするという提言があり, 堂本氏も賛同された。さらに松田氏は, 古代ケルトや古代ゲルマンが「木の葉」と深い関わりを持ってきたこと¹⁵⁾を紹介され, 「柏の葉」という地名の由来に触れ, 「木の葉」にまつわる行事を起こすこと, 音楽祭を実施するという具体案を提示された。

(3) 第三期; 芸術への第一歩

2008年のパネルディスカッションは好評を得て, 多くの参加者から追加講演の希望を頂いた。県民プラザは翌年も松田氏を招きパネルディスカッションを実施したいという強い要望を持ち, 著者¹⁶⁾はその旨を松田氏に相談したところ, 氏は“小さな勉強会を積み重ねましょう”と快諾してくださった。

これと前後し(2008年2月)に環境健康フィールド科学センターでは, 村田裕之氏(村田アソシエイツ株式会社代表)からカレッジリンク方式シニア住宅についての提案があり, その検討が始まった。そして, 2009年1月からカレッジリンクプログラム¹⁷⁾・パイロット講座(6回)が始まっていた。また, 著者が実施してきた柏市福祉を担う人材育成講座を修了した市民が自主講座を継続していた。多くの市民の潜在的な自主講座の要望があったことから, 2009年7月16日「学びの街づくり〜いのちに学ぶ〜」(松田義幸, 古在豊樹, 三輪正幸, 徳山郁夫)を皮切りに, カレッジリンクプログラム特別講座として当センターにおいて松田氏を講師として継続的な勉強会が始まった。この勉強会を重ねて2009年12月13日に県民プラザにて再度パネルディスカッション「“いのち”と向き合う生涯学習」(松田義幸, 古在豊樹, 平山満紀, 奥村準子, 徳山郁夫)¹⁸⁾を実施した。勉強会は, その後も「1Q84に学ぶ」, 「なぜ魔女は山羊が好きか」, 「芸術都市の創造」, 「なぜ魔女は山羊が好きか2」, 「日本の心と源氏物語」, 「芸術都市の誕生」などをテーマにしながら, 人々の心の中に普遍的にある五穀豊穡・種族繁栄・怨霊慰撫への願いと, これらを伝承する仕組みとしての神話などについて展開¹⁹⁾された。人間が“生きること”への情熱や想い, 不安からくる祈り, そして平穏への感謝などが文学や芸術, そして都市誕生の歴史に昇華され, 市民の生きる方向性に反映していたことを学んだ。

この勉強会にさらに新しい出会いがあった。勉強会に東京大学新領域創成科学研究科准教授尾田正二氏が参加されたことを契機に, 東京大学(柏の葉キャンパス)を会場として2008年のパネルディスカッションで提案された音楽イベントの企画が持ち上がった。そして, 各方面の協力を得ながら, 2011年3月11日に「田中正平記念フォーラム; 芸術と技術の出会いによる新領域の創成」²⁰⁾を開催することが決定した。ところが, 準備も整い開演を待つだけとなった14時46分, 東日本大震災が発生した。夢の第一歩は, 急遽, 中止にせざるを得ない事態になった。

その後, 大勢の方々の強い要望と関係者の努力で「田中正平記念フォーラム」は, 2011年7月2日に開催され

るに至った。

考察とまとめ

2011年7月12日、柏市、千葉県、東京大学、千葉大学、三井不動産株式会社は、柏の葉キャンパス駅周辺の“まちづくり”を通じて世界に社会的課題の解決モデルを提示するというスタンスとその戦略を発表した。これは、1) 地域全体の発電量・受電量・消費電量を一元管理するなど軸とした「スマートシティ」、2) 超高齢化社会への対策としての「健康長寿都市」、3) 新たな事業・研究領域の開拓に向けた公民学連携および都市における農業実施に向けた植物工場などの「新産業創造都市」の三つを軸とした戦略である。わが国の現代的な社会問題の解決に挑む未来型の“まちづくり”に最先端のテクノロジーを結集しようというものである。

倉本聰は「文明の前に森林があり、文明の後に砂漠が残る」²¹⁾と述べている。東日本大震災からしばらくして、村上春樹がカタルーニャ賞受賞スピーチ²²⁾で自らを“非現実的な夢想家”と揶揄しながら、われわれ日本人が、“効率”を追いかけ、現実的という理由のもと“便宜”を押し付けられている間に、大切な倫理や規範を見失ってしまったと指摘している。

ハビタス・メンタリス (habitus mentalis) という術語がある。その時代にその社会に生きる人々の根底に横たわる支配的なものの見方、考え方、感じ性である²³⁾。そのコミュニティーにとっては、当たり前で意識に上りにくいかもしれない心の習慣のようなものである。おそらく村上のいう“大切な倫理や規範”は、日本人のハビタス・メンタリスという見えない価値がつくり、伝承してきたものであろう。京に“雅”があり鎌倉に“わび”と“さび”があったように、人々が共同で目指す美意識の根底にあるものがハビタス・メンタリスである。

あるいは、既に私たちのハビタス・メンタリスは、工業化社会で培われたものに変質してしまったのかもしれない。“効率”という言葉に踊らされつつ、大量生産・大量消費という無駄を受け入れてしまっている。もう一度、人類の遺産としての叡智に学び、永く次世代に残すライフスタイルを実践できる“まちづくり”を実践しなければならない。生涯学習とは、眼先の実用的な知恵を獲得するものではなく、人間としての究極的な目標に辿り着くためのものに他ならない。

エピメテウスがパンドラの壺を開け、災いが世の中に飛び出したというギリシャ神話がある。テクノロジーの開発は、パンドラの壺を開けたように人間のさまざまな欲望の実現を解禁させたことになりかねない。テクノロジーの開発が急速に進む今日こそ、コミュニティーに共同で培ってきたハビタス・メンタリスを確認する必要性に迫られている。さもなければ、テクノロジーが欲望を暴走させることになりかねない。人類に普遍的に受け継がれてきたもの、日本文化に固有に受け継がれてきたものを学ばなければならない。

現代社会は、自然の畏怖畏敬の念に触れ、生命の神秘の力に驚き、古典文学や芸術のなかに人類普遍の情念を感じ、心を躍らせ、そして言葉に表せないようなこの感

覚を他者と共有することが乏しくなってしまった。わが国の学びは、経済発展につながる人材育成とテクノロジー開発など目に見えやすい教育一辺倒に傾き、見えない価値の教育は幾分蔑にされてきた観がある。

地球的規模の環境破壊、エネルギーの枯渇などが明らかにされ、大量生産・大量消費に前提とした物質的な所有に依拠して幸福を追求するライフスタイルは限界を指摘されている。そして提言されたのが生涯学習の課題である“人間らしさ”(Learning to be)の実現による幸福の追求である²⁴⁾。

新たな“まちづくり”を目指す柏の葉キャンパスタウンで、“芸術と技術の出会い”という音楽イベントを市民が公民学と共に実現し、生涯学習としてハビタス・メンタリスを文学や芸術に学ぶという動きが始動している。この第一歩は、2008年のパネルディスカッションでの松田氏の提案にあった。“まちづくり”を通じて世界に社会的課題の解決モデルを提示するというスタンスの柏の葉キャンパスのなかで、その基本構想の精神的支柱になるべきものを確認する生涯学習が始動している。

謝 辞

著者は、2008年2月松田義幸先生(当時実践女子大学)宛てに唐突に講演依頼の手紙を差し上げました。著者の不躰な申し出に耳を傾け、その上、この申し出に快く応えていただきました。以来、生涯学習・教養教育、そして“まちづくり”について懇切丁寧にご教示いただきました。そして、同年パネルディスカッションでは、歴史を踏まえて“まちづくり”に大切な啓示をいただきました。さらにそれ以降、大変お忙しい中を度々、柏の葉キャンパスタウンに足を運んでいただき無償で勉強会の講師を引き受けてくださいました。

田中正平記念フォーラムの開催に際しては、東京大学大学院新領域創成科学研究科尾田正二氏をはじめ公益財団法人ローランド芸術文化振興財団、尚美総合芸術センター、公益財団法人ハイライフ研究所、三井不動産株式会社、柏市、流山市、株式会社リベラルアーツ研究所、千葉県生涯学習センター・芸術文化センター「さわやかちば県民プラザ」など、各方面の多くの方々のご協力をいただきました。

勉強会“カレッジリンクプログラム特別講座・柏の葉学術・芸術都市フォーラム”に参加いただいた受講者の方々が生涯学習の主旨を理解し応えて下さっていることが著者らの励みであり、生涯学習による“まちづくり”の可能性を確信に変えつつあります。

“まちづくり”に参画していただいたここに書ききれない大勢の方々に心から感謝申し上げます。

注および参考文献

- 1) 設立当初は「環境健康都市園芸フィールド科学教育研究センター」という名称であったが、2008年「環境健康フィールド科学センター」と変更した。
- 2) 古在豊樹「環境健康フィールド科学センターの理念と実践」農と環境と医療、北里大学、Vol. 13, 2006

- 3) 田中重好「都市計画の社会学序説」弘前大学人文学部人文社会論叢(社会学編)第1号, 1999
- 4) 2004年2月8日「柏の葉キャンパス駅周辺のまちづくり連絡議会」(千葉県主催)発足
2005年8月24日 つくばエクスプレス開通
- 5) 2006年11月20日 UDCKオープン
- 6) 栗生明「環境健康宣言都市の創造」鹿島出版, 2007
- 7) Full-value Contract; 「グループメンバーの努力をお互いが肯定的に評価すること」という“約束ごと”に従って行動することを参加者同士に同意, 約束してもらうこと。アドベンチャー教育「プロジェクトアドベンチャー」の核心となるコンセプトの一つである。環境健康フィールド科学センターは, このコンセプトを提唱したJ. ショール氏を本学に招き, この考え方についての講演を行った。千葉大学環境健康フィールド科学センター編「孤立する青少年のこころを救うアドベンチャーの意味と理解」(J. ショール講演記録), 2004
- 8) 紙面の関係で詳述できないが, ここで述べている“コミュニケーション”は, 伝達や受信という狭い概念ではない。もちろん, 言語的コミュニケーションや非言語コミュニケーションを含むものである。たとえば, 送信された情報の無視や拒絶もコミュニケーションである。
- 9) この間に行ってきた講演会, シンポジウム, ワークショップの概略
- ・2003年10月11日(日)「孤立する青少年の心を救うアドベンチャーの意味と理解」ジム・ショール講演会(Project Adventure Inc. プログラムディレクター)
 - ・2004年3月27日(日)環境健康講演会特別シンポジウム「“いのち”の輝く街づくりに向けて はじめの一步; スポーツからのメッセージ」(池上正; ジェフユナイテッド市原コーチ, 池田守; 柏レイソルコーチ, 難波克己; プロジェクトアドベンチャー・ジャパン, 加藤史子; 「メンタルトレーニングで部活が変わる」著者, 原田知子; NATAトレーナー)
 - ・2006年7月10日「フィールドに学ぶ人生 ~日本のサッカーを変えたオシム~」イビチャ・オシム講演会
 - ・環境健康講演会
「コミュニケーションからライフスタイルを考える みんなと学ぶ自己発見」12回シリーズ(2005年8月25日~2006年7月27日)
「“まちなぎ”とコミュニケーション」6回シリーズ(2006年9月28日~2007年2月22日)
「ヒューマニクス」6回シリーズ(2007年4月19日~2007年9月27日)
「コミュニティ・ビルディング」6回シリーズ(2007年11月8日~2008年4月17日)
 - ・2007年5月13日環境健康講演会特別シンポジウム「“いのち”の輝く街づくりに向けて—その2—メンタルバリアフリーに向けて」(小林幸一郎; NPO法人モンキーマジック)
また, このような関心から大型商業施設「ららぽーと柏の葉」内でフリークライミングによるコミュニティーづくりを実践してきた。
- ・徳山郁夫「フリークライミングによるコミュニティーづくりの事例的研究『ららぽーと柏の葉』における経緯」千葉大学教育学部研究紀要, 第56巻, p. 327-333, 2008
 - ・徳山郁夫「フリークライミングによるコミュニティーづくりの事例的研究(2) ボランティアの活動に焦点をあて」千葉大学教育学部研究紀要, 第57巻, p. 303-310, 2009
 - 10) さまざまなイベントの実施の他に, 学習プログラムとして「まちづくりスクール」, 「柏の葉エコデザインツアー」, 「五感の学校」などを実施してきた。また, 社会実験・事業創出として多数のプログラムを運営し続けている。
<http://www.udck.jp/design/>
 - 11) 私たちは, 仕事という部分に照らし出された自身しか見ていない。だから全体(whole)としての人間の成長を目指すという意味である。Wholeという語はHolyという語につながる。Holidayは, 仕事を離れ神と向き合う日になっている。
 - 12) 余暇開発センターから筑波大学教授, 実践女子大学教授を経て, 現在尚美学園大学理事長・学長。著者が講演依頼をしたのは, 実践女子大学に勤務されていた時期(2月)であったが, その年の4月から尚美学園大学に学長として移られた。幅広い領域にわたる多数の著書があるが, 生涯学習, レジャーについて理解を深めるには, 以下の著書・論文がわかりやすいと思われる。
 - ・松田義幸「レジャー産業を考える」多摩大学ビジネス叢書1, 実教出版, 1993
 - ・松田義幸他「グレートブックスとの対話 ~学習社会の理想に向けて~」かながわ国際交流財団, 1999
 - 13) 県民プラザ主催の生きがいづくり講座「我いかに生きるべきか」(13回シリーズ)の講師を引き受け, 生涯学習をテーマに講義を実施した。そして, このうちの一回を広く一般市民に公開するパネルディスカッションとし, その基調講演の講師を松田義幸氏に依頼した。
 - ・2008年11月9日「充実のライフスタイルを考える; レジャーとしての学び」
「新しいまちづくりを考える」パネルディスカッション(松田義幸, 堂本暁子, 古在豊樹, 徳山郁夫)千葉県さわやかちば県民プラザにて
 - 14) この講演映像記録は, 翌年のカレッジリンクシンポジウム「“いのち”と向き合う生涯学習」(松田義幸, 古在豊樹, 平山満紀, 奥村準子)とともに下記のアドレスで視聴できる。
<http://www.kplaza.pref.chiba.lg.jp/plaza/kouza/kiroku/koen.html>
 - 15) 木の葉leafに触れて存在することから, 「信じる」beliefにつながり, 信じるからこそ愛loveが生まれる。そしてタバコやお茶を一服と称してし, 薬として身体に取り込んできた。「木の葉」を大切に, 四季の変化, 月の満ち欠け(自然のリズムに心身を委ねる), それらとつながる神話を大切にしてきた。
 - 16) さわやかちば県民プラザ桜田秀樹氏(現在南流山小

- 学校校長)の熱心な尽力があった。
- 17) 地域コミュニティー・市民と大学と一緒に現実の問題に対して課題解決型の学びを推進する。市民が講義を聴くという受講型から課題解決のための参画型を推進するプログラム。
- 18) 2009年12月13日カレッジリンクシンポジウム「“いのち”と向き合う生涯学習」(松田義幸, 古在豊樹, 平山満紀, 奥村準子, 徳山郁夫)千葉県さわやかちば県民プラザにて。この映像記録も前掲, 県民プラザのホームページで視聴できる。
- 19) 通常の勉強会は討論ができるように20名~25名の参加者で行い, 外部講師をお招きする場合は80名くらいの参加者に公開して実施した。
- ・2009年7月16日「学びの街づくり~いのちに学ぶ~」(松田義幸, 古在豊樹, 三輪正幸, 徳山郁夫)千葉大学環境健康フィールド科学センターにて
 - ・2010年4月23日「女性が幸せな社会に向けて~日本の心と源氏物語」(松田義幸, 堂本暁子, 杉浦俊治, 徳山郁夫)千葉大学環境健康フィールド科学センターにて
- 20) 田中正平:東京大学物理学部を首席で卒業し, 森鷗外らとともにドイツベルリン大学に留学した。ドイツでは音響学を研究し, 純正調オルガンを制作し, 皇帝ヴィルヘルム2世の前でも演奏した。東京大学新領域創成科学研究科が主催で行う音楽シンポジウムを「田中正平記念」と銘打った。
- ・2011年3月11日 田中正平記念フォーラム(震災により開演直前に中止)
 - ・2011年7月2日 田中正平記念フォーラム「芸術と技術の出会いによる新領域の創成」講師;富田勲氏・梯郁次郎氏(ローランド社創業者),(東京大学新領域創成科学研究科主催, 公益財団法人ローランド文化財団共催, 千葉大学環境健康フィールド科学センター後援)東京大学柏図書館メディアホールにて
- 21) 倉本聰「冬眠の森」新潮社, 1987
- 22) 村上春樹氏のカタルーニャ賞受賞スピーチは, 2011年6月9日バルセロナにて。
- 23) 松田義幸「脱産業社会に向けての課題(1) —レジャー研究の自分史—」実践女子大学生活科学部紀要, 第38号, p. 23-37, 2001
- 哲学者G.ルカーチ, 美学者E.パノフスキーが使った。その時代にその社会に生きる人々の根底に横たわる支配的なものの見方, 考え方, 感じ性である。
- 24) E.フロム「生きるということ」(To Have or To Be) 紀伊國屋書店, 1977